「浮雲」小論

――人物形象の分析――

山崎国紀

一

二葉亭の「浮雲」の評価については今日、定説らしきものが形作られるに至つている。それは「浮雲」の革新性をなすところの高度なリアリズムと劃期的な心理描写にあるとされている。長谷川泉はこの事について「『浮雲』が発表されるや、当時の文壇は評論家石橋忍月をはじめ、こぞつて最大級の讃辞でこれを迎えた。それは近代文学史上最初に、こころみられた大胆な文章改革による精到な写実主義によつてであつた。その意味で『浮雲』は、また自然主義文学の先駆ともされるのである。」と言つているがこれは大方の評を端的に要約したものであろう。[1]

このように「浮雲」は明治二十年代の初頭を飾る革命的な作品として絶対的な評価を受けている。今この小論ではこのように、ほとんど絶対化された「浮雲」に対し、断片的ながら多少の批判、検討を加えてみたいと思う。つまり「浮雲」のマイナスの面と思われるものをその中心的主題としてとりあげてみるわけである。

小論の主要な論点を先に述べるならば、「浮雲」は従来通り絶対的な位置に鎮座していて、いいものだろうかという点にある。その疑問は「浮雲」を構成しているほとんどの領域に及んでいる。

「革新性」という点から「浮雲」をみた場合確かに当時としては稀有の作品であることは否定出来ない。一面その「革新性」の故にこの小説を文学史の黄金の席に据え、以後時を経るに従つて名作視してきた点はないだろうか。吾々研究者は文学作品に対する時、文学史的地点から堀鑿すると同時に、むしろその地点から離脱した位置で、即ち純文芸的、芸術的な局面から考究する態度を失してはならないだろう。勿論文学活動にあつて「革新性」のもつ意義は大きい。旧態依然を打破しようとするそれ自体には貴重な価値があることは当然である。が「革新性」の故に、その一面に幻惑され、その作品に対する正当な分析をあやまり、それを必要以上に偉大作として価値づけることに危険が存在しているのだ。名実共に、その作品を名作視しようとするならば、この「革新性」と「文芸性」とが破綻のなきようしつくりと融合していてこそ初めて、それも容認され

る事なのだ。私はこのような考えのもとに「浮雲」を考察し、それによつて「浮雲」に濃厚に附帯している金メッキにふれながら、明治二十年代に位置する「浮雲」の意味を検討してみようと思う。

二

成程、文体改革に示した二葉亭の業績は近代文学成立に大きく貢献しているだけに十分認められるべきものはある。が卒直に言つてこの「浮雲」で示された言文一致は戯文的な古い文体と新しい文体とが随所に混淆し合つたもので、近代文学としては、まだ未成熟な段階にあると言わざるを得ない（文体に対する論述は省く）。

中村光夫は「浮雲」の表現方法について[2]

当時の小説の群を抜いて作者の思想や好悪をはなれた客観的リアリズムでありました。（中略）彼が自然主義の先駆者とみられるのもこのように「人生のありのまま」を描いた点に於てであります。

と云つている。「浮雲」に於けるリアリズムの問題も幾多の研究者によつて指摘されている。確かに後の硯友社作家、又逍遙でさえ表面は客観的な写実を標榜しながらややもすれば作者の主観が加わることが多かつた時代に、二葉亭の或る程度の客観性は認められる。があくまでも或る程度の客観性であり、私は中村氏の言つているような「客観的リアリズム」を「浮雲」の中に無条件に容認することは出来ない。表現方法に於て或る程度の客観的写実を認めることは既述したが、それも云うなら作中人物達の日常動作の描写に於て納得出来るのであつて、作中人物達の性格形象に於ては、むしろ実在感が稀薄で、かなりの誇張があるように思える。これは私の極論であるかも知れないが、二葉亭が「浮雲」を完成に至らずして中断した原因は、この性格形成の誇張が禍したのではないかとも考えるのだ。作中人物一人々々を個別にみた場合、どこにでも散見する人物類型であろうが、これらを小説の構図の中に組み合せた時、相互の性格が極端に違いすぎ、それぞれが浮き上つてしまい、実在感が稀薄になつてくるのだ。[3]長谷川泉氏は次のように言つている。

「浮雲」の創作モチーフはロシア文学にある。しかも又、一種の公式が日本の現実にあてはめられたものであり、日本の現実そのものからの追求から昇華したものでない。

これは二葉亭自身の言葉に長谷川氏が見解を加えたものであるが、「浮雲」の人物創造の誇張もこう云つたところにも一因があつたと思われる。この人物形象の誇張は、文三と昇とに最も強くあらわれている。性格の異なる人物を対比させて小説の効果を高める方法は、小説作成の常套手段でもあるが、それを破綻のなきよう、無理を感じさせないように仕上げるには、このような対照的な性格の中にも何か触れ合うものがなくてはならない。つまり文三の友人、本田昇は文三に比し極端に異質な性格として位置づけられている。そこには必然性がなく、いかにも作為感が漂うている。文三の一見誠実で軟弱な陰湿さに対し、昇を徹底的に狭猾、利己主義、無神経、又非情な男に描いてある。これでは客観的リアリズムを疑わざるを得ない。「ありのまま」を描くという点からすれば文三の内面ばかりに拘泥せずに、人間としての昇の内面をも開陳すべきではなかつたか。その点、昇にしても、お勢にしても、表現描写が平盤で深味がない。

昇を表現するに、只、文三に対比した性格として描写しただけでは、いかにも作為感が感得され、リアリズムを否定したくなる。

文三と昇は朋友であると文中で言つている。少なくとも、「朋友」と言われるものの間には、相互信頼、親和感、同情の観念等々が内在していなければならない。併しこの両人の間には、そのような心性は微塵も存在していない。冒頭から終末まで猜疑、誹謗、軽侮、怨念の意識で満されている。文三の如き、鋭敏で感受性の強い人間に、この昇の性格が交友当初から看取出来ない筈がない、ところがさ程抵抗もなく朋友関係になつている。ここらあたりにも、すでに二葉亭の無理が露呈されているようだ。

そう言つた私の疑問を深める一例として。冒頭部の文中に文三が役所を罷免になり、昇と話しながら帰つてくるところがある。ここで打ちひしがれている文三に対し、昇は一べんの思い遣りもなく、二人が別れる直前の会話で

「ダガ、君の免をくつたのは弔すべくもまた賀すべしだぜ」「なぜ」「なぜと言つて、君これから朝から晩まで情婦(いろ)のそばにへばり付いていることが出来らアネアハアハアハ」。(第一篇。第一回)

と昇に言わせている。二葉亭は朋友として、ここで文三に対し、昇の鼓舞と同情の念を表現しようと思つたのかも知れないが、前後の会話を通じてみても、この会話から感じられるものは朋友としての温い同情や真剣な鼓舞の感情ではなく、あるのは昇の優越感であり、恐しく陰惨で野卑な感情だけである。文三はそれを余り気にもせず「高い男は(文三、筆者注)顔に似気なく微笑を含み、さて失敬のあいさつも手軽く」(第一篇。第一回)別れている。既述した知く非常に繊細な柔紙のような神経の持主である文三が、この昇の言辞に傷つけられない筈がない。実に不可解な事と言わねばなるまい。文三が退職になり、お政、お勢に、うとんじられ、日毎悲痛な思いに懊悩している時でも、昇はきこえよがしにお勢に猥褻な戯れをしたり、文三に対しては

「オイ、好男子、そう苦虫をくいつぶしてゐずと、ちよつとこつちを向いてのろけたまへ。コレサ丹治君。これはしたり、御返答がない。」(第二篇。第十回)

と言つたような罵言を呈する事しかない。この昇の非情さは増々激化し、それも妙に湿度を帯びた執拗さで文三を追いつめている。何故ここまで昇を軽薄、利己的非情なものとして表現しなければならなかつたか、これによつて官僚主義に対する批判としようとしたのだろうが、それは正鵠を得ていない。「浮雲」の官僚批判は課長の性格の中に十分うかがわれる。例えば、二葉亭は文三の課長を次のように描いている。

此の課長殿といふ方は、曾て西欧の水を飲まれた事のあるだけに「殿様風」といふ事がキツイお嫌ひとみえて、常に口を極めて、御同僚方の尊大の風を御誹謗遊ばすが、御自分は詳判に気六ヶ敷屋で、御意に叶はぬとなると、瑣細な事にまで眼を剝出して御立腹遊ばす、言はば自由主義の圧制家といふ御方だから、哀れや属官の人々は御気嫌の取様に迷ひて……(第一篇。第六回)

これは勿論課長一個人の特殊な性格として批判しているのではなくて、上級官僚によつて象徴されている官僚主義に対する批判と受けとられるのだ。よしんば昇の性格創作に作者の官僚批判がこめられ

ていたとしても、あのような悪玉的性格を強調しすぎたのでは、的はずれもはなはだしいと言わねばなるまい。ともかく昇によつて、文三の誠実さ又は軟弱性を対照的に浮彫りにしようと意図したのかも知れぬが、いづれにしても作品の客観性という点からみればその誇張が目立ち、作品の上に破綻をきたしていると言いたい。

三

文三の性格創造に於てもいささかの無理を感じる。二葉亭の最初の意図は役所を罷免になつた一人の人間の生き方を克明に描こうとしたのであろう。確かに一面の真実性は把えられている。理想と現実との相剋、その挫折により日夜苦悶する人間像の追求、それ自体には当時としては見るべく新しさはある。併しそれも第一篇あたりまでは納得出来るが、回を重ねるにつれ、文三の性格も段々と内部分裂をきたしてくる。ここでその文三の言動を追つてみよう。文三の罷免を知つた母から次のような手紙が文三の手元にくる。

こう申せば、そなたはお笑ひなされ候かは存じ申さず候へども、手紙の着きし当日より一日も早く、もとのやうにお成りなされ候ように〇〇のお祖師さまへ茶断ちして願掛けいたし居り候ま（ところどころ）ま、そなたもその積りにて油断なく御奉公口をお尋ねなされたく念じまゐらせ候。（第二篇。第八回）

文三は幼くして父を失い、母の手一つで育てられた。苦学時代も「父の死後たよりのない母親の辛苦心労をみるにつけ聞くにつけ、子供心にも心細くもまた悲しく、始めて浮世の塩が身にしみて……これからは給仕なりともして、母親の手足（たく）にならずとも、せめてわが口だけは……」（第一篇。第二回）と思いつづけきただけに、母の心痛も文三は十分自覚している。そして、この手紙を受け取つてからも

「……薄命とはいひながら私の身がきまらんばかりでとしよつた母にまで心配かけるかと思へば、随分……たまらない……」（第二篇。第八回）

と日夜それを気に病んでいる。ともかく今の文三には役所に復帰することがすべてを好転さす事であると骨の髄まで認識しながら、昇の官庁復帰への助言も、目前の感情の為に拒絶し、そのためにみんなの嘲笑の目を意識して、憤怒やる方なく「……このままおめおめと退くは残念、何かいつてやりたい、何かコウ品のいい悪口雑言、一言下に昇を気死させるほどの事をいつてアノ鼻づらをヒッすツてアノ者面をあからめて……」（第二篇。第九回）とひどく狭少な感情に拘てつている。そし又しても

「いッそおばの意見について廉恥も良心もすててしまつて、課長の所へいッてみようか知らん。依頼さへしておけば、たとへば今がどうならんと言つても、おばの気が安まる。さうすればお勢さへ心変りがしなければまず大丈夫といふものだ。且つおつかさんもこのごろじや茶断ちして心配しておいでなさるところだから、これば かりで犠牲になつたといッてもあへて小胆とは言はれまい。コリアいッそおばの意見に……」（第二篇。第十一回）

と「猛然と省思す」るがそれには、昇に頭を下げねばならぬ。そんな事は文三には「死しても出来ぬ」と「決心してみれば、おばの意見にそむかなければならず、おばの意見にそむくまいとすれば昇に一

着を輸さなければならぬ。それもいやなり、これもいやなりで二時間ばかりというものは黙坐して腕をくんで沈吟して嘆息して千思万考審念熟慮してくつたくしてみたが詮ずる所はもとの木阿弥。」（第二篇。第十一回）この文面をみても文三は、「小胆と言はれまい」「お勢の心変りがしなければ」よいと言つた愚劣な自己防衛のみに及々としていて、人間として、又男としてとらなくてはならない大義名分を完全に放擲している。そしてこの文三の呻吟はとどまることなく「……今、私さへ我を折ればわたしの身もきまるシ、老母も安心するし、「三方四方」（トことばに力こぶを入れて）まるく納まる事だからわたしもできることならそうしたいがシカシそうしようとするには、良心を締め殺さなければならん。課長の鼻息をうかがはなければならん」（第二篇。第十二回）と又もや同じところを逡巡している。全く「詮ずる所はもとの木阿弥」である。これはどうみても意志薄弱者の心性である。それだけに文三が拘泥する「良心」が必然的な説得力をもたず、空転としか受けとることが出来ない。この文三の主張する「良心」とはいかなる意味をもつているのか、母親を心配させることと、課長に拘泥しないことと、このどちらに「良心」の存在意義を置こうとしているのか。この際、むしろ母親を心痛さすことが「良心を締め殺さなければならない」ことに結びついてくるのではないか。この「良心」の把握が二葉亭の内面でよく整理されていない感じもするのだ。

このような文三の心理状況は回を追うに従い熾烈になり、「真つくらなざしきに、しよんぼりと始終何事か考へている」（第三篇。第十六回）状態がつづき遂に強度の心神消耗的症状を呈するに至る。

始終お勢の事を心配してゐるうちにいつからともなく注意が散つて一事には集らぬやうになり、をりをり互に何の関係をも持たぬちぎれちぎれの事を取締もなく思ふ事もあつた。かつて両手をかしらに敷き仰向けにふしながら天井をみつめて初めは例のごとくお勢のことをかれこれと思つてゐたが、そのうちふと天井の木目が眼に、はいつて突然妙なことを思つた。かうみたところは水の流れた痕のやうだな。かう思ふと同時にお勢のことは全く忘れてしまつた。

（第三篇。第十九回）

そしてこの木目から「オプチカル・イルリユウジョン」を連想し物理学を思い出し、それを教えた教師や、学生の顔々、之と連想が縦横に移つてゆき最後に「サルレエの脳髄」の事を考え突然何の連絡もなく、又お勢の事が「胸を突いて」出たりする。確かに、こうまで一人の人間の心理を執拗に開陳してみせた二葉亭には当時としては驚嘆すべきものがあつたと思う。しかし作品の展開の中で文三の性格を吟味した時、幾多の矛盾につき当るのは事実である。

何故こうまで徹底的に軟弱な生活不能者としての文三を描かねばならなかつたか。文三の挫折をもつて当時の官僚腐敗を批判しようとするならもつと文三が権力と闘い、生活と闘い、なおかつ破れ去つていくというシチユエーションにした方がより真実性もあり迫力もあつたのではないか。「浮雲」の文三はその点、精神的にも経済的にも、全く不能者の状態で、自己の狭い殻の中に閉じ籠り、自身で敗北に追いやつている。小説の表現の上では、文三が役所を罷免になつた為にそのような結果を招来したかのように表現してあるが、

文三の性格を「浮雲」の展開過程の中でみていくと、その性格の故に、当然なるべくしてなつた感を強めている。「何故ああ不活発なのだらう」（第二篇。第八回）とお勢にも言わせているが自分から苦難を切り抜けて、希望を求めようとする心意がほとんど感じられない。自分にはどんなことよりも母親を安心させる義務があると自覚していながら、限りもなく昇に対する憤怒とお勢に対しては綿々たる恋情にまとわれつかれながら、同じところを停滞し呻吟している。

そして一層不可解なのは、お勢に対するものである。お勢の上づつた軽卒な動作や媚態を自己流に解釈し〝お勢の愛情は吾にあり〟と思い込み第二篇の後半部分でお勢と昇との仲を疑つて興奮し「それじや……それじや……こうしましよう。今までのことはすつかり……水に……」と言い更にお勢のとぼけた「何です今までの事とは」と言うことばに

「この場になつてさうとぼけなくてもいいではありませんか。いつそ別れるものなら……きれいに別れようじや……ありませんか」（第二篇。第十二回）

と言つている。完全にお勢に翻弄された文三の一人相撲である。恋の一人思案と言うのはよくある。しかし文三の場合は、お勢と一度だつて恋を語つたことも、恋人としての約束をした訳でもない。だのにここに至つて「水に流さう」「別れよう」と言う言辞は全く文三の精神状態を疑わざるを得ない。男として罷免という人生の危機に直面し、それに対して積極的な対策を講ぜず、どんなに軽侮され揶揄されてもジイと停滞し、ただしていることと言えば、お勢に対する一種の妄想だけが目立つとしたら、これは明らかに文三の性格に欠陥があるとみられても仕方があるまい。正常な神経の持主には出来得ないことであろう。

要するに文三自身の中に病的な神経が潜在していて、それが正常な判断と行動力を喰い破つているのだ。それだけに文三の潔癖性又は誠実性が、健康な神経の上に立脚していないので、やや浮き上つた感があり、作為感はまぬがれない。二葉亭の意図にかかわらず、文三はこのように表現されているのだ。この文三の性格からして、必ずしも課長に迎合的でなかつたから、役所を罷免されたと云うより、文三の軟弱な又は病理学的な性格の故に、自然淘汰的に官庁勤めから脱落していつたと言うことも考えられるだろう。この事は当然「浮雲」のもつ悲劇性に接触してくる。「浮雲」の悲劇性については種々の論議がつくされている。が、大方の定説は文三が官庁を罷免されてから惹起されるところに主点があるようだ。併し私の論法ですなら、そう言つた他者からの働きかけによつて悲劇性が惹起されるのでなく、すでに文三自身の性格の中に、悲劇的資質を内在していたということである。つまり「浮雲」の筋の展開を通じて文三の悲劇性を表現しようとしたのであろうが、最早やそれ以前に文三自身の病的な神経によつて自身を悲劇の中に追い込んでいると言える。

四

お勢はどうか。文中で次のように言つている。

……その後英学をはじめてからは、悪あがきもまた一段で、じゆ

ばんがシャツになれば唐人髷も束髪に化け、ハンケチでのどをしめ、うつとうしいをこらへて眼鏡をかけ、ひとりよがりの人笑はせ、あつぱれ一個のキャッキャになり済した。

（第一篇。第二回）

お勢なる人物を、当時軽薄な（とみられていた）欧化主義に対する諷刺としてその人物設定をしたとするなら、確かにまだ欧化主義が社会の表面を浮動したまま社会に定着していなかつた感じを、お勢なる人物によつて表現し得ている。[4] 広末氏もお勢について「文明語辞典の鸚鵡のような軽薄な、そして次第にその付焼刃であることをみせるお勢は、日本近代の仮面を暴露するものとして描かれている」と指摘している。が併し「浮雲」の中でみるお勢は、あくまでも軽薄な欧化主義を観念化し形骸化したお勢に過ぎないと思える。小説の展開を通じて軽薄な欧化主義の象徴としての素材であるお勢が、根無草のように闊歩し、作品の中に溶け込んだ生身をもつた人間らしいお勢の姿をみつける事が出来ない。即ち素材として余りにも観念化されたお勢が、一貫性のない言動を無責任にまき散らして、あわただしく素通りしてゆく。そこには、自然なる人間としての体温を感じ取ることが出来ない。それは二葉亭が、お勢を描くに小説構成上素材としてのお勢のみに、とらわれ、真の人間としての表裏の肉付けを怠つているからである。例えば第一篇の部分で、お勢が文三の罷免のことで母親と口論してまで、文三の立場に理解を示している。お勢がその口論の中で、

「私は条理のあるところを主張するのです」（第一篇。第五回）

と再三に亘つて文三の弁護をしている。併し作者自身文中で

……新主義と時代おくれの旧主義と衝突する所よく眼を止めて御覧あられましよう（第一篇。第五回）

と言つているように、小説展開の中でお勢自身の心意から出るべくして出た言葉でなく、新旧対立を表現するためにわざわざこの場面を設定したものと推察出来る。実際作者自身も後の回憶談で「新旧両思想の衝突ということもゴンチャロッフが名著『頽れ岸』の中によくかいてあるのをみて日本に応用してみたのです。『浮雲』はすつかり真似たものです」と言つている通りに、このお勢の使い方にも必然性がない。つまり新旧対立を表現するための単なる媒介物としてお勢なる人物を使用している観がある。ここに余りにも意識された素材としてのお勢をハッキリみる事が出来る。お勢は文三の罷免に対しても理解を示すどころか、小説の展開過程からみていくと、むしろ無関心であるとさえ言える。それから考察するとお政とお勢の新旧対立を強調するために、この口論の場だけに素材としてのお勢を使用して、文三に理解を求めさせている感じがする。こう言つたところに、「浮雲」の人物達が素材としての生硬さをもち、作品の中に生きた人間として融け込んでいない欠陥を認めることが出来る。換言すれば、小説素材として認知されたお勢が、小説展開の中で精練されない原型のままで登場させられたとも言えるだろう。

「浮雲」の終りの篇中に

「ゆゑなくして文三をはづかしめたといひ母親にさからひながらいつしかそのいひなりになつたといひ、それほどまで親しかつた昇と、にはかにうとうしくなつたといひ――どうも常事ではなく思はれる。」（第三篇。第十九回）

と二葉亭は叙述している。この言葉こそ、まさしくお勢の性格描写にゆき詰つた作者自身の、切実な当惑の言葉ではないだろうか。最初からお勢を欧化主義に対する批判の象徴としての人物原型を二葉亭の心中に描いたものの、いざ執筆にとりかかり、その人物描写の展開にあたつて、作者の内部でよく咀嚼されてなかつたことが禍となり、二葉亭自身分厚い壁につき当つたに違いない。

五

「浮雲」主要人物四人の中ではお政が比較的よく描かれているように思える。文三が罷免になると、それ迄の柔和な態度が急激に硬化し、底意地の汚い一種の悪女に描かれている点に、強いて言えば誇張がないとは言えないが、総体にお政の人物描写にはそう無理がない。当時の東京下町の功利的で利発で、しかも威勢のよいおかみさんタイプを巧く表現し得ている。

ただ気になるのは、小説構成に於て、お政、お勢、昇の三人を文三に対する敵対者のように描いたことである。それによつて、文三が生来の虚弱な性格を増々倍化し、一種の神経病的な症状を呈するだけに、読む者は、ここで「追いつめる者」と「追いつめられる者」とに色分けされて映じることである。これを更に蒸餾すると悪者と善者に類別される危険がある。読者は当然、前者に反撥をもち、後者に同情をもつことになる。このような小説構成は、文学上非常な障碍となる。通常、文学に於て、啓蒙小説、通俗小説特に犯罪小説等々以外に作中人物を劃然と色分けする方法は余りほめられたものではない。この手法は当時としては勧善徴悪的な戯作小説に多くみられる傾向である。その点から考察して、二葉亭は「浮雲」の人物形象に於て、作者の主観が偏寄らない公正な地点に立つていたかと言えば大いに疑問である。仮りにも、近代性を標榜し、時代の先駆者たらんと志す小説ならばより客観的でなくてはならない。真に客観的地点に位置して人間を表白しようとすれば、その人間のもつ表裏をも抜け目なく冷静に観察しなければ、中村氏の言う「客観的リアリズム」は樹立出来ないだろう。「浮雲」に於て作中人物達のそれぞれの極端な特性を強調しただけでは、まだ無条件にリアリズム文学として容認することは出来ない。

六

以上断片的ながら作中人物の性格創造を主点にして「浮雲」の欠陥と思われるものを指摘してきたが、次にこう言つたマイナスの面は何に原因しているのか。さまざまな原因が存するであろうが、ここではその一つの主因と思えるものを指摘したい。

二葉亭は明治二十年代初頭に至り、ベリンスキーの文学理論や、逍遙などの文学革新理論等々に刺戟され、当時としては稀有な革新文学意識を燃え上らせていた。そして自らその試金石として、その理論を文学上に表現しようとする先駆者としての急迫な意識をもつて「浮雲」にとりかかつたものとみえる。ところがこの旺んな意欲に反して、作中人物達の把握が、二葉亭自身の内部でまだ咀嚼し得ない残滓を残したまま執筆に入つた為に、小説の稿が進むに従い、作中人物達が不消化の証痕を露呈し始め、てんでの方向に頭を向けて、作者の冒頭の意欲に背中を向けてしまつたと思えるのだ。こう

言つたところにも二葉亭が中途で折筆してしまつた原因があると思える。

私は小論で「浮雲」に抱く種々の疑問点を羅列したに過ぎなかつたが、小論の主点はあくまでも「浮雲」に対する価値再検討にあると言つてよい。既に陳述したように従来から「浮雲」に対しては実質以上の評価がなされてきた。私は種々の角度から「浮雲」を検討してみて、その一種の偶像視に対し、いささかの疑問を持たざるを得なかつた。一個の文学作品として考究した時、小論で述べているような欠陥が認められる以上、「浮雲」に対する従来からの稍々過大評価気味な定説をそのまま盲従することが出来なくなつたのである。革新性の故にその作品を名作視することは危険である。「浮雲」の評価にも、かなりそれが認められる。明治二十年代に於ける「浮雲」の位置は確かに大きい。併し逍遙らによつて発せられた文学革新理論が二葉亭自ら「浮雲」に火がつけられた程度で、それもかなり炎上した部分もありながら、結果に於ては不燃焼のまま火が弱まつた感があるのだ。

こう言つた論拠から考察すれば「浮雲」の内部にはまだまだ検討しなければならない問題が残されているのでなかろうか。

注(1) 長谷川泉「二葉亭四迷」「近代日本文学」所収

(2) 中村光夫「現代日本文学史」(筑摩版)

(3) 長谷川泉「近代日本文学」所収

(4) 広末保「二葉亭四迷」浮雲(「現代文学総論」I所収)